『佐伯文庫』おぼえがき補遺

井　尾　義　徳

豊後の国佐伯藩第８代藩主毛利高標（たかすえ）の創設になる『佐伯文庫』が、わが国の文庫史上きわめて重要な位置を占めていることについては、前号においてかなり詳細に述べたところである。その高標が、毛利２万石の居城のある城山の麓三の丸城内に、３棟の御書物庫を建設し、充実著しい蔵書の収納管理に着手したのは、天明元（1781）年のことであった。御書物庫は、書庫２棟と書物奉行所の３棟から成るもので、これが世にいう『佐伯文庫』の創設ということになる。

一方、これよりさらに４年前の安永６（1777）年には、その三の丸の楼門（現存）より200メートル足らずの大手門に向かって左手、門番所に隣接し、大手前（現寿屋前のほぼ三角形の広場）に面した目抜きに、藩校「四教室」（しこうどう）を新築創立した。豊後では、竹田岡藩の「修道館」（享保11年、1726)、大分府内藩の「遊焉館」（明和８年、1771）につぐ３番目の藩校の開校である。この藩校が年を追って充実するにつれ、今で言う大学の付属図書館の役目を果たす施設が求められるようになってきた。それまで藩主の蔵書として三の丸の館に保管してあった多くの図書も、三の丸が藩政の中心であり、かつ藩主起居の居館でもあるため、藩校の教師や学生が自由に閲覧することはむずかしく、かくして館とは別棟の書庫や閲覧室、それに書物奉行の執務室などの建造が必要視された結果が、まさに『佐伯文庫』の創立を強く促したことは想像に難くない。藩内興学と藩の子弟教育振興によせる、23歳の青年藩主毛利高標のひたむきな情熱がうかがい知られることがらである。

四教堂祭主松下筑陰と日田の広瀬淡窓

ところで、その藩校「四教堂」の教育がすぐたれ実績を上げることができたのは、藩主毛利高標の識見・教育的情熱と、質量ともに充実してきた御書物倉架蔵の書籍に負うところ大であったが、それとともに、四教堂の祭酒（学長）として日田の地から招聘できた松下筑陰の存在を特筆しなければならない。松下筑陰は、久留米の生まれで西洋と号し、学徳高い教育者として知られていたが、実はかの広瀬淡窓幼少年時代の学問の師であり、両人は深い親交を結んだ間柄であった。

松下筑陰が毛利高標に招かれて、日田から佐伯の地に移住したのは、寛政６（1794）年の春、寅之助（淡窓幼名）少年が14歳のころであった。淡窓は師筑陰の後を追って佐伯に遊学し、四教堂の側にあった筑陰の家に寄寓して、四教堂に学んだ。師と起居寝食を共にした淡窓は、筑陰に大きな影響を受けたにちがいない。惜しくも病を得た淡窓は、１年足らずにして帰郷を余儀なくされたが、それより15年後の文化７（1810）年、恩師筑陰の訃報に接した淡窓が、その日記『懐旧楼筆記』の中で次のように記しているのは興味深いことである。「此年冬」は文化７年、淡窓29歳。

> 此年冬西洋先生歿せられたり、年四十七なり。予十歳の時より教を受け、撫育の恩浅からず、別後其遠境を以て問安の礼に闕けり、ここに至って感嘆にたへず。（中略）先生室あり、筑より従ひ来れり、先生に後るること数年にして歿せられたり、先生の義子を佐助と称す。佐伯侯に事へたり。

それから７年後の文化14（1817）年、淡窓が開いた咸宜園では門弟３千人を育てて高野長英や大村益次郎をはじめ幾多の有為な人材を送り出したことは、世に広く知られているが、その淡窓から深

く敬仰されていた松下筑陰という人物の学徳のほどは、想像に余りあると言うべきであろう。

幕府への献書理由あれこれ

毛利高標没後26年、文庫創設から46年を経た文政10（1827）年、高標が生涯の情熱を傾けて集めた佐伯文庫８万巻４万冊の貴重書の中から、ほぼ半数に当たる２万758冊の漢籍と医書が江戸幕府に献書されたことは前号にも述べたが、その理由については「諸説があって判然としない」と記すにとどめた。その諸説中の主な２説を簡単に紹介してみたいと思う。

献書の理由の一つは幕府命令説である。この当時は、各藩からの献書がかなり行われていたようであり、幕府による文教の中央集権化の一環であったと見ることもできる。せっかく祖父高標が苦心して集めた貴重な蔵書を大量に手離す孫高翰（たかなか）の苦悩も、家臣らの論議も並たいていのものではなかったと推察できるが、やはり外様にしてわずか２万石の小藩としては、幕府の要請に追従し、幕府との有形無形の円満な関係を維持することは、きわめて重要なことであったと思われる。

故梅木幸吉氏は著書『佐伯文庫の研究』の中で、佐伯に残る藩の記録から文政10年正月６日のものを取り上げた上で、「幕府より内々伊勢守（高標）集書の中から三千部を献上するよう要請があったらしいこと、毛利侯は之に対して要請を承知したと思われること、さらに高標が享和元（1801）年秋８月47歳で没した後、幕府は佐伯藩に対し蔵書目の提出を要請しており、その書目によって献書を命じて来たものと思われることなどを述べている。

また、幕府からの蔵書目提出要請に対して、佐伯藩では「佐伯蔵書目」が作成されたが、その作成の中心をなしたのが前記松下西洋四教堂祭主であり、江戸まで持参したのも松下西洋自身であった。その間の事情もまた淡窓の日記『懐旧楼筆記』の記事で明らかになっている。

献書理由のいま一つは佐伯藩事情説である。梅木氏は『佐伯文庫の研究』の中で藩の古書『佐伯古老物語』の言い伝えを紹介している。即ち、佐伯藩領内には、藩預かりの天領の飛地が散在し、それがとかく紛争のもとになったので、献書と引きかえにそれらの飛地を昔通り佐伯藩に返還してもらう目的があったというのである。ただしこれらは旧藩士からの聞き書きによるものであるから、果たして信ずるに足るものであるか疑問と言わざるをえない。また、献書に対して幕府は、紅葉山文庫と昌平黌に分けて収蔵し、特に紅葉山文庫では書庫の増改築や蔵書目録の改訂までに行い、その保管と架蔵に万全を期したといわれるが、一方佐伯藩毛利侯への処遇はというと、葵御紋付の時服（季節に合せた衣服）十と、御鞍鐙一背分に過ぎなかったことが、佐伯藩の記録に残っている。さらに天領飛地の返還については、幕府からは何等の沙汰もなかったという。

無二のお宝であるはずの最善本を２万冊も献納した真の理由を、確たる証をもって定めることは不可能であるが、思うに、この二説はいずれも真実であったのではないか。幕府側の文教政策と、佐伯藩側のお家の事情や思惑とが偶然に一致したのではないか。どうもそんな気がしてならない。

前号の「『佐伯文庫』おぼえがき」に書き遺したいくつかのことを補う意図で、エピソード的に書き綴ってみたが、いずれ稿を改め佐伯文庫の洋書についても紹介したいと考えている。

（いお・よしのり・短期大学部、講師）